

- 24) 司会、月村辰雄（東京大）、パネリスト、鷺見洋一（慶応大）、長谷川輝夫（上智大）、宮下志朗（東京大）。
 25) 拙稿、『『人間は樹木のごとく……』(II) 二人の旅人』『明星大学研究紀要』、第7号、——および註12) - 13) および「中世文学における旅（航行と紀行）の神話的要素の抽出と動性の心性史的意味を問う研究」平成8年度～平成10年度科学研究費補助金、研究成果報告書、平成11年3月、pp.19-30参照。

イタリア・ポローニャのドミニコ会士、フランチェスコ・ピビーノ（Francesco Pipino）によりおよそ1320年ごろヴェネツィア語の版からのラテン訳を見る。写本数およそ50、最も広範囲な成功を収める。この版のラテン語初版が明星大学所蔵（1483年ないし1484年の刊行）のもの（この件に関しては；同『紀要』、第2号、5）p.178）をも参照。今回、ピビーノ本である事は疑いの余地はない、とメナール氏の本学の「稀観本」室での言（10/12）。

すでにメナール氏は1992年来日の折、この初期刊行本を閲覧。それより三年後、1995年2月5日付きの氏よりの書簡で依頼を受け、筆者は翌年にかけて明星大学所蔵本と東洋文庫本（1485年刊行）をページを追って詳細な比較をし、纏められた結果を氏に送っている。

〔国際学術講演会〕 フィリップ・メナール氏 『『散文トリスタン物語』における独創性』

（10月16日（土曜）、午後、於青梅校舎）

『東方見聞録』以上に、40周年を寿ぐこの行事の一環「国際学術講演会」である『散文トリスタン』に関してはまず配布資料が必要であると判断された（資料ページ参照）。「散文」と銘打たれた、専門家にとっても漸く1997年になってテキスト全体を読む事が出来る、——「資料」V.「メナール教授の指導による校訂本の刊行」参照——それ以前はレジュメのみが存在した訳で、一般（学生、非専門家）に知られる事はなかった。講演は長大なこのテキストを縦横に引用し、読んだ事のないとまず想定される会場とのギャップは甚だしいものがあった。

10/12の二つの講演（クローデルとマルコ・ポーロ）はシンポジウムという形式の持つ一回性の中から救出せねばならないもの、すなわち「日欧文化交流」を記し留めておくという急務があった。ところが、単発の講演はそれだけで「閉じる」のであって、テキストとしての講演が刊行される事を前提にしていればそれを「今から」分析してみせるのはなお適当ではない。

マルコ・ポーロと同様に²⁶⁾、起案者にして通訳たる稿者に早々に今夏、講演の「要約版」²⁷⁾が手渡された。だがマルコ・ポーロの場合のように絶えざる推敲の対象でありつつも、原稿全体ではなかったし、次々に新たなバージョンを渡されることはなかった。

講演の壇上で、雄弁になったメナール氏は、常時2分から3分の長丁場をしいた。通訳者は『散文トリスタン』を読み親しんで²⁸⁾いなければその任を全うし得なかったろうし、自分の理解した場面をその場で我々の言語に再現に努めるという事になった。

ただし、こうした入れ替え故によりわかりやすくなった筈であり、めったに中世学者でも読まぬほかのテキストの引用が突如入ったりをクリアできた安堵感があった。

『『散文トリスタン物語』における「独創性」、講演タイトルのみが当初与えられて、ポスター等の印刷に追い込まれたわけであるから、「独創性」innovation、lat. novus（新しい）から理解される「刷新」、「革新」、「改革」、「新機軸」という含みの多い語の訳出には多少の戸惑いがあったの（独創性）となった。勿論、タイトルのみを持ってしても、まず「韻文」

ベルール (Béroul) やトマ (Thomas) (ともに 1170 年代の制作) のテキスト群に対し、「新機軸」となる、という諸点が取り上げられようとの予想は十分に立っていた。それにしても八月末、原稿を手渡された段階では、講演当日におけるラテン的「雄弁」さで強調されるテキストの「独自性」、「独創性」は「書き換え」—「韻文」変じて「散文」—レヴェル²⁹⁾にとどまらぬ事が十分に伝わってきた。「物語の形式上または発想にもたらされた独創的な改変に光を当て」たい。ついで「相違点は類似点に勝る」と断じ、モデルとなった筈の「韻文」に対して、相対的に「新たな」というよりも「この作品の主題と形式上の独創性、そのものを検討」という発言が壇上で耳に入り、初めて講演タイトル邦訳の妥当性を確信したのであった³⁰⁾。

次いで非専門家 (学生、一般聴衆) を前に、「トリスタンとイゾー物語」という極めて大ざっぱな常識もコンセンサスが成り立たなかった。そのためにハンドアウト作成は I. 『トリスタンとイゾーの物語』はフランス 12 世紀の創造した「神話」、「伝説」、II. 日本での「トリスタンとイゾー神話 (伝説) の受容」を説明して準備とした。フランスの中世文学学の碩学ジョゼフ・ペデイエが『断片』として残ったベルールやトマ、さらにこの二つの『断片』が切断をみる前に全体を読み、把握した上での中世ドイツ語版を参照して、『トリスタンとイゾー物語』³¹⁾の全貌を伝え、それをもっていわゆる「トリスタン物語」とされる経緯を提示しておいた。文庫本に 1953 年に入り、第一刷から数えほぼ半世紀を経て、2004 年 10 月 25 日、65 刷、という報告を受けている本書の影響は計り知れぬものがある。

次段階での問題は「韻文」=十二世紀の創作を「散文」=十三世紀に受け渡すための改変、変化がメナール氏の今回の講演主題であれば、その実態が簡略に提示されねばならない、ということになる。そこで「資料」III. 12 世紀の『トリスタンとイゾー物語』(韻文)、IV. 13 世紀の『トリスタン物語』(散文) を対比的に示した。とくに対異性間の愛の創造と確認、その中世独特の形態——「洗練の愛」——を定義する必要があった。まして本講演が「イノワシオ」をこの点に限っているのであるから、講演理解の基礎ともなる。

「散文」の最も知られたヴァージョン、「流布本」はおよそ 1230 年から 1240 年より後と見なされ、——写本数およそ 90 (本講演でのメナール氏の言。従来 80 強、と看做されてきた) を数える——この『散文』をもってヨーロッパ中世はトリスタンとイゾーの話を受容した。『東方見聞録』の成立 1298 年と 60 年程の開きしかない、いずれも 13 世紀の「散文」テキストである。『見聞録』の執筆の前年、1297 年は innovation という語彙の初出年代³²⁾であり、この意味は大きい。二つのテキストの書かれた時代は「新しい」ものへの志向が、未知への憧憬が、芽生え「変化」を模索する時代に位置する。Ars Nova. ついに、「新しい」ものが価値となる。

註

26) 上掲註 7) 参照。

27) 8 月 27 日に手渡されたものには“Les Innovations du Roman du Tristan en prose”, version résumée pour la conférence. Exemplaire de Shigemi Sasaki”と表紙にメナール氏の手書きが読まれる。

28) 筆者の『散文トリスタン』関係の論考は大略①“Anel” et “Seel”: de Béroul et du Lancelot au Roman de Tristan en prose” in *Miscellanea Medievalis, Mélanges offerts à Philippe Ménard*, études réunies par Jean-Claude Faucon, Alain Labbé et Danielle Quéruel, tome II, Paris, 1998, pp. 1203-1212; ②“Tristan et ses/ les “brachets” dans le Roman de Tristan en prose”, in *Miscellanea Medievalis, Mélanges offerts à Franç-*

ois Suard, textes réunis par Dominique Boutet, Marie-Madeleine Castellani, Françoise Ferrand et Aimé Petit, tome II, Paris, 1999, pp. 821-830 ; ("L'Image canine du Roman de Tristan en prose à Brunetto Latini", 国際宮廷風文学会 (Société Internationale de la Littérature Courtoise) 総会、於 University of British Columbia (Vancouver)、平成10年7月(研究発表)をもとにトリスタンのブラシェ犬のみに限った論稿(③「『散文トリスタン物語』における「鉾物誌」ないしその出典に関する一考察——鉾物の介人と「物語」の企み——」、「明星大学研究紀要」、平成15年3月、日本文化学部、言語文化学科、第12号、pp. 216-220(所収『中世フランス文学論集』、第三卷(邦文篇(II)、明星大学出版部、2004/3/31, pp. 1-25); ④「「邪の城」と対異教のモルドレンとアウグスチヌス」、『中世フランス文学論集』、第三卷(邦文篇(II)、pp. 28-43); ⑤"Piere" et "pome" dans le Roman de Tristan en prose, Colloque sur le vocabulaire de l'ancien français, 於広島大学文学部、平成16年3月(研究発表); ⑥Le château de Priam dans le Roman de Tristan en prose, in *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, N°84, Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises, Tokyo, mai 2004, pp. 1-18(国際アーサー王学会(Société Internationale Arthurienne)第20回総会、於 University of Wales(名誉会長 Ph. メナール氏司会での研究発表の所収); ⑦Statue de Galaad dans le Roman de Tristan en prose, Société Internationale de la Littérature courtoise, University of Madison, 平成16年8月3日、(現会長 J. Hall MacCash 氏司会による研究発表) ⑧"Kaierre d'or" de Galaad dans le Roman de Tristan en prose"(印刷中、専門誌、フランス/ベルギー) ⑨"Apollo de Lionois et son lévrier", 国際アーサー王学会第19回総会、於 Université de Toulouse-le-Mirail, 2001/7(研究発表) および「『散文トリスタン物語』の受容の問題(『散文トリスタン』からガストン・フェビュスへ)」、日本フランス語フランス文学会総会、於明治学院大、平成12年5月(研究発表)——前者(要旨所収、*Bulletin Bibliographique de la Société Internationale Arthurienne*, vol. LII, 2000, p. 435)の『散文トリスタン』の挿話分析の後者(要旨所収 *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, N°77, 2000, p. 108)は受容を扱った——をほぼ合わせた論稿は『ロマニア』(*Romania*)、仏専門誌、次号(2004)に掲載。⑩「一本の樹の下にあって」(於明星大学、人文学研究科、英米文学専攻、講演、平成17年2月14日)(以上1998年以降の十稿)。

- 29) なぜ「散文」化か? 13世紀初頭から手直しを「韻文」=「音読」から「散文」=「黙読」の読書形態の変化のみでは説明され得ぬ理由がここにある。読み手の前に形成されるサロンという共有空間は伝統に背く要素を容易に消化しないのではないか?(どのくらいの速度で、どのくらいの段落を読み聴かせたか? 伴奏のテンポ、その置き所など多くは不明なのだ)「個」による沈思の時間のみがそれを理解し、味わう。制約する修辞に嵌められた clichés は「イノワチオ」(下掲30)参照)に矛盾するばかりかそれを阻む。
- 30) "innovación, Neuerung, Erneuerung; innover, renouveler, Neuerungen einführen." (*Altfranzösisches Wörterbuch*, A. Tobler nachgelassene Materialien, bearbeitet und herausgegeben von E. Lommatzsch, Vierter Band, Wiesbaden, 1960, col. 1398)
- "Ende 13. Jahr."として Godefroy X 18a を指示、Godefroy の問題箇所では 1297 年を初出としている。メナール氏編纂の *Dictionnaire étymologique et historique de la langue française*, par E. Baumgartner et Ph. Ménard, Paris, 1996, innovation では XIV^e としている。さらに Du sens de "changement", on est passé dès le XVIII^e s. à celui de "invention" et "création nouvelle, valeurs largement répandues en fr. mod.
- 31) 佐藤輝夫(本学名誉教授)による邦訳。
- 今日のフランスの一般読者もベデイエ版による理解である点で事情は同じである。
- だが邦訳のロング・ランは国際的にも格別の注目を浴び、先年、ローザンヌ大の Alain Corbellari, *Joseph Bédier, écrivain et philologue*, Genève-Paris, 1997. (ジョセフ・ベデイエの中世文学研究に関する博士論文の著者。ソルボンヌでの公開審査を通過。)は本邦訳を筆者に問い合わせてきた。審査委員長フィリップ・メナール氏と二三の審査員にも同時に何冊かを送付。
- 32) 上掲註30)参照。

(最後にこの二つの催し「国際シンポジウム」と「国際学術講演会」の起案者であり直接企画と全体に関わった立場から、明星学苑と大学と学長氏原淳一氏に、そのご高配に深甚の感謝を捧げる。また日本文化学部長井川健司氏および言語文化学科の主任柴田雅生氏、同僚にはその厚い支援に対し御礼申し上げる。それなくしての実現は不可能であつたらうから。)

上記三つの講演は別箇に刊行が進行中である。